喜劇論への視角――「コワスラン文庫120番」をめぐって

三　浦　　洋
北海道情報大学

The Ancient Theory on Comedy suggested by the *Tractatus Coislinianus*

Hiroshi MIURA
Hokkaido Information University

平成25年 3 月

北海道情報大学紀要　第24巻　第 2 号別刷

〈論　文〉

喜劇論への視角――「コワスラン文庫 120 番」をめぐって

三　浦　　洋*

The Ancient Theory on Comedy suggested by the *Tractatus Coislinianus*

Hiroshi MIURA**

【要旨】アリストテレスの『詩学』は一巻本として伝えられているが、元来は第Ⅱ巻に喜劇論を含む二巻本であったという推測がなされてきた。その推測を支える他著作の相互参照などは必ずしも信頼できないゆえ、第Ⅱ巻の存在をめぐっては賛否両論がある。しかし、ヤンコの校訂による「コワスラン文庫 120 番」の喜劇論を参照するならば、『詩学』第Ⅱ巻に喜劇論が含まれていという推測に有力な根拠が得られる。それは、喜劇論に不可欠な「滑稽さ」、「揶揄」の概念を通じて、この文書が『ニコマコス倫理学』の内容と整合するからである。本稿は、「コワスラン文庫 120 番」を仲立ちにして喜劇論における『詩学』と『ニコマコス倫理学』の密接な関係を明らかにし、不整合な内容が含まれてはいるものの、『詩学』における断片的な喜劇への言及と一致する論点が多いことから、「コワスラン文庫 120 番」は枢要な部分で彼の喜劇論を反映していると結論づける。

【Abstract】The *Poetics* is known as one of Aristotle's treatises which has just a single book. But some scholars are still thinking that the original version of this treatise consisted of two books, and that the Book 2 elaborated on his theory of comedy. Although their proofs such as cross-references between his treatises are not enough to make us sure of the existence of the Book 2, the *Tractatus Coislinianus* edited by R. Janko helps us admit that. In this paper, I will show the close relationship between the *Poetics* and the *Nichomachean Ethics* which includes some points about comical laughter and joke, elucidating theories of the *Tractatus.* It will be concluded that the *Tractatus* reflects his main theories of comedy.

【Key words】アリストテレス（Aristotle），詩学(Poetics)，喜劇（comedy），悲劇(tragedy)，カタルシス(catharsis)

*北海道情報大学　情報メディア学部　情報メディア学科　教授（**Professor；Department of Information Media, Faculty of Information Media, Hokkaido Information University）

1　『詩学』第Ⅱ巻の問題

現在、『詩学(ラテン語名 Poetica、ギリシャ語名 **Περὶ ποιητικῆς**)』の名で知られるアリストテレスの著作は、悲劇と叙事詩に関する考察を中心とする一巻本(校訂により全 26 章に区分)であるが、元来は第Ⅱ巻に喜劇論を含む二巻本であったという推測がしばしばなされてきた。その最大の根拠は、悲劇論を開始する『詩学』第 6 章 1449b21-22[1]において、叙事詩と喜劇についての考察を後に行う旨が記されていることにある。しかし、この約束が果たされたという証拠もないため、元来が一巻本であり、現存する『詩学』がそのすべてだという見方も今なお有力である。かくして、『詩学』第Ⅱ巻の喜劇論が存在したことを認めるかどうかについては賛否両論があり、そのいずれかが決定的な優位性を持てる状況ではない。そこで、問題の構図を看取するため、賛否両陣営の主要な見解を要約することから始めよう。

まず、ベルナイス[2]、ヤンコ[3]、クーパー[4]など、第Ⅱ巻が存在したと推測する人々は、その根拠として次の三点を挙げる。(1)現存する『詩学』のテクストにも喜劇への言及が断片的に含まれている。とくに、詩作の様式、発生原因と歴史を述べた第 1 ～ 5 章では、喜劇が悲劇や叙事詩と並ぶジャンルとして扱われており、執筆当時のアリストテレスは既に十分に喜劇論を準備していたと考えられる。(2)『詩学』以外のアリストテレスの著作には、特定の主題について『詩学』の論述を参照するよう求める記述がいくつか見られ、その中には現存する『詩学』には含まれない主題があることから、失われた第Ⅱ巻にその内容があったと推察される。例えば、『弁論術』1372a1-2、1419b6-9 では『詩学』において「滑稽さ」に関する議論を行うと記されており、これは喜劇論の一部だったと想像される[5]。また、『政治学』1341b38-40 では「カタルシス(**κάθαρσις**　浄化)」という語が意味する内容を『詩学』において詳述する旨が記されているが、現存する『詩学』の悲劇論ではそれが果たされていない。それゆえ、失われた第Ⅱ巻に「喜劇のカタルシス」への言及があり、同時に詳細なカタルシス論が展開されていたと想像される。(3)アリストテレス以外の著者、とくに後代のテクスト校訂者・翻訳者や著作目録が『詩学』第Ⅱ巻もしくは喜劇論を指示している。とくに、『詩学』の表題が複数形で表記されていたり、「第Ⅰ巻」という表現が含まれたりしている場合があり[6]、これらの事実は第Ⅱ巻の存在を示唆する。

ところが、シュート[7]やマクマホン[8]など、第Ⅱ巻は存在しなかったと推測する人々は、以上の論

---

[1] アリストテレスの著作からの引用箇所はベッカー版の巻・章・頁・行で示した。著作名の略号は以下の通り。Poe.:『詩学』、Rhet.:『弁論術』、Pol.:『政治学』、EN:『ニコマコス倫理学』

[2] J. Bernays, *Zwei Abhandlungen über die aristotelische Theorie des Dramas*, Berlin, 1968(1880), p.145

[3] Richard Janko, “From Cathrsis to the Aristotelian Mean”, in *Essays on Aristotle's Poetics*, ed.Amélie Oksenberg Rorty, Princeton, 1992, p.349

[4] Lane Cooper, *An Aristotelian Theory of Comedy,* New York, 1992, pp.10-15

[5] 『詩学』第 5 章には、喜劇の「滑稽さ」についての簡単な説明が含まれているものの、詳しい議論はない。

[6] 例えば、O 写本に準拠した 13 世紀のウィリアム・メルヴェルクによる『詩学』ラテン語訳は「第Ⅰ巻」と表示されている。

[7] R.Shute, *On the History of the Process by which the Aristotelian Writings Arrived at their Present Form*, Oxford, 1888, pp.47-48

[8] A.P.MacMahon, “On the Second Book of Aristotle's Poetics and the Source of Theophrastus' Definition

点にことごとく反論する。すなわち、(1)アリストテレスが当初、喜劇論の執筆を計画していたとしても、何らかの理由で果たさなかったと考えられる。(2)他著作の『詩学』に対する相互参照の要求は後代の加筆である可能性が高く、信頼できない。もしアリストテレス自身が相互参照の要求を記したのだとしたら、全著作の執筆計画をあらかじめ綿密に立て、それを実行した上で記したと考えねばならないが、そう想像するのは困難である。ましてや、アリストテレスの著作の題目が固定されるのに彼の死後、数百年を要したのだから、断定的に著作の題目を明示する相互参照の要求は彼自身のものではありえない。(3)『詩学』の古典語表記は古来、単数形になったり複数形になったりと揺らいでおり、明確な根拠なしに変えられてきた経緯がある。したがって、複数形の表記が必ずしも二巻本であったことを含意しない。また、『詩学』の他に、アリストテレス初期の対話篇『詩人論』を併せて複数形で呼んでいた場合もあったと考えられる。「第Ⅰ巻」という表記も、必ずしも第Ⅱ巻以降の存在を含意するとは認めがたい。

このように、第Ⅱ巻の存在を否定する見解は、存在を認める見解に劣らず説得力を持っている。つまり、(1)～(3)の根拠は、疑う余地のないものではないのである。しかし本稿は、シュートやマクマホンの主張を尊重しつつ、なおも『詩学』第Ⅱ巻が存在していたと推測する立場をとる。その理由は、1839 年にクラマー[9]によって発表され、1984 年にヤンコ[10]の校訂による注釈つきテクストが公刊された「コワスラン文庫 120 番(Tractatus Coislinianus)」(以下、「コワスラン」と略記)が『詩学』第Ⅱ巻の喜劇論の存在を強く示唆するからである。

パリ国立図書館収蔵の「コワスラン」は、300×206 ミリの羊皮紙 263 連から成るギリシャ語の手稿で、各連は左右 31 行あり、小文字で書かれている。第一部(1～229 連)はコンスタンティノープル大司教表を含み、ニコラス大司教の再任までが記されていることから、ドブリーズは筆写年代を紀元後 911～945 年と結論づけた。他方、第二部(230～263 連)は、ポルピュリオスの『エイサゴーゲー』(アリストテレスの論理学に関する入門書)からの抜粋や、アンドロニコスの『感情論』が混然と含まれている。その 248～249 連の約 400 語の中に『詩学』と同一の文が含まれ、用語法や内容の点でも『詩学』と近似した喜劇論が見出されるのである。校訂者のヤンコはこれを、哲学文書の要約が盛んに行われた古代末期(紀元後六世紀頃)の成立と推測した上で、『詩学』第Ⅱ巻からの直接の要約だと結論づけた。ヤンコのほかクーパーやスターキー[11]も、アリストテレスの喜劇観ないし古代ギリシャの喜劇論を伝える唯一の文書としてこれを高く評価する。クーパーによれば、アリストテレスの直筆とは考えられないものの、彼の学説を受け継いだペリパトス派の何人かによって書かれたという推測が成り立つ。しかし一方で、「コワスラン」の文章が『詩学』に似ているがゆえに模倣作だと見るベルナイスや、部分的に『詩学』と一致しない記述が含まれることから「コ

---

of Tragedy", Harvard Studies in Classical Philology 28, 1917, pp.9-19

[9] J.A.Cramer, *Anecdota Graeca e Codd. Manuscriptis Bibliothecae Regiae Parisiensis*, Oxford,1839。このクラマーの書のほか、J.Vahlen, *Aristotelis De Arte Poetica Liber*, Leipsic, 1964(1885)や、J. Bernays の前掲書 pp.137-139 に含まれる"Ergänzung zu Aristoteles' Poetik"にも喜劇論のテクストが掲載されている。

[10] R.Janko, *Aristotle on Comedy: towards a Reconstruction of Poetics II*,Oxford, 1984

[11] W.J.M.Starkie, *Acharnians*, London,1909

ワスラン」の価値を否定するバイウォーター[12]のような見方もある。上述の(1)〜(3)の根拠と同様、「コワスラン」も『詩学』第Ⅱ巻の喜劇論を推測する上で絶対の信頼性を持つ文書ではない。

それにもかかわらず、本稿が「コワスラン」に注目するのは、従来の論者たちとは異なった観点に立つからにほかならない。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』が内容上、『詩学』と密接な関連を持つことは、これまでほとんど顧みられてこなかったが、『詩学』の悲劇論は「憐れみ」、「畏れ」、「快」、「善き人(ἐπιεικής)」といった概念において、『ニコマコス倫理学』の論述に多くを負っている[13]。したがって、もしアリストテレスが『詩学』に喜劇論を書いたとしたならば、その内容もまた『ニコマコス倫理学』と関連することは容易に想像されるのであるが、「コワスラン」を仲立ちにした場合、両著作は「滑稽さ」や「揶揄」など喜劇論に不可欠な論点、とくに現存する『詩学』が欠く論点においていっそう緊密な連関を示すのである。なるほど、『ニコマコス倫理学』の中に『詩学』への参照を求める要求は見出されないし、また、その反対方向の参照要求もない。ただ、人間の行為と感情の考察において両著作が連関しているという事実そのものを看過すべきではないのである。

簡略にいえば、喜劇論に関する『ニコマコス倫理学』と『詩学』の気づかれにくい関係を証し立てる第三の書という意味で「コワスラン」に注目するのが本稿の立場である。このような視角から、従来支配的だった研究手法と異なった方途をとり、「コワスラン」の意義と問題を明らかにしたい。

2 「コワスラン」の喜劇論

まず、詳細を検討する前に、「コワスラン」校訂者のヤンコに従って全体を 18 の節に分け、文書の構成を俯瞰しておくことにする(第Ⅲ節のみ、喜劇ではなく悲劇に対する言及である)。

詩作の分類(第Ⅰ、Ⅱ節)
悲劇の特質(第Ⅲ節)
喜劇の定義(第Ⅳ節)
喜劇の滑稽さ(第Ⅴ〜Ⅷ節)
喜劇の働き(第Ⅸ節)
喜劇の構成要素(第Ⅹ〜ⅩⅥ節)
喜劇の構成部分(第ⅩⅦ節)
喜劇の作風の変遷(第ⅩⅧ節)

以上の構成は、「コワスラン」の「論考(Tractatus)」と呼ばれる本体部分に関するものであり、このうち第Ⅴ、Ⅵ節の内容は、「序論(prolegomenon)」と題された別の部分の第Ⅵ節と内容がほぼ

[12] I.Bywater, *Aristotle on the Art of Poetry*, Oxford, 1909, pp.xxi-xxii
[13] この点については拙稿「アリストテレスの快楽説とカタルシス論」、北海道情報大学紀要第 22 巻第 1 号、2010、pp.1-14 で考察した。

一致している。以下では、適宜、「序論」の内容も参照して考察を進めることにする。

さて、「コワスラン」の喜劇論と、現存する『詩学』の悲劇論を比較してみるとき、両者には構成上の共通点が見られる。まず、『詩学』の悲劇論は、①悲劇の定義(第６章前半)、②悲劇の構成要素(第６章後半)、③悲劇の優れたストーリーについての規範的考察(第７～11 章、第 13～22 章)、④悲劇の構成部分(第 12 章)から成る。それに対し、「コワスラン」の喜劇の定義(第Ⅳ節)は①に、喜劇の構成要素(第Ⅹ～ⅩⅥ節)は②に、喜劇の構成部分(第ⅩⅦ節)は④に対応している。また、喜劇に固有の「滑稽さ」の源泉が「語法(滑稽な言葉づかい)」と「行為(滑稽な振る舞い)」にあると指摘する第Ⅴ、Ⅵ節、及び、喜劇は滑稽な登場人物を揶揄するが誹謗しないと説く第Ⅶ、Ⅷ節は、「憐れみ」と「畏れ」など悲劇に固有の感情を喚起するストーリーを論じる③と類似した観点を有する。さらに、喜劇は均衡のとれた「滑稽さ(笑い)」を目指すとする第Ⅸ節は、喜劇のカタルシス(第Ⅳ節)を解説していると見られることから、①に含まれるカタルシス句(悲劇の働きは憐れみと畏れを通じての、そのような感情の浄化にあるとする句)と類似の役割を果たしている。このように、枢要部分において『詩学』の悲劇論と「コワスラン」の喜劇論は構成が類似している。

また、「コワスラン」における詩作の分類(第Ⅰ、Ⅱ節)は、詩作を模倣的なものと非模倣的なものに分けるなど、『詩学』には見られない内容を含むが、詩作の分類を企てているという限りでは『詩学』第 1～3 章における各ジャンル(悲劇、喜劇、叙事詩など)の様式比較と似ている[14]。

ただし、『詩学』の論述内容とは異なり、「コワスラン」第Ⅲ、Ⅸ節では「均衡のとれた畏れ」の達成が悲劇の働きとされているため、この点については本稿第３節で考察する。さらに、喜劇の作風の変遷(第ⅩⅧ節)については、『ニコマコス倫理学』の娯楽論と関連することから、あらためて本稿第４節で検討する。

では、「コワスラン」の詳細の検討に移ろう。第Ⅳ節では喜劇が次のように定義されている([ ]内の句とアルファベット記号は筆者の挿入)。

> Ⅳ　喜劇とは、A[対象の面では]滑稽な行為の、それも大きさを持たないが完結した行為の模倣であり、B[素材の面では]作品の部分ごとに別々の種類の[快く響く言葉を用いて[15]]、C[形態の面では]語りによってではなく演じる方式をとり、D快と滑稽さを通じて、そのような諸感情のカタルシスをなし遂げるものである。喜劇は、滑稽さを母として持つ。

---

[14] 「コワスラン」の内容が『詩学』第Ⅱ巻の反映であるなら、重複を避けるため、第Ⅰ巻で述べられたのと同じ内容を含まないのは道理あることである。また、詩作を模倣的か否かという観点から分類する志向は、『詩学』の読者が抱く疑問に答える内容ともなっている。というのも、『詩学』では抒情詩、祝勝歌、教訓詩など古代ギリシャの重要ジャンルが扱われず、ストーリー展開を持つジャンルだけが考察対象とされているからである。詩作のうちストーリーを持つジャンル、すなわち出来事・行為を模倣するジャンルだけが排他的に考察されている以上、模倣的でない詩作ジャンルを明示的に区分する志向が生じるのは理解できることである。

[15] これは Vahlen, op.cit.の挿入句である。

この規定が、次に掲げる『詩学』の悲劇の定義と同じ分節構造を持つことは、直ちに把握されるだろう。

> 悲劇とは、a[対象の面では]真面目な行為の、それも一定の大きさを持ちながら完結した行為の模倣であり、b[素材の面では]作品の部分ごとに別々の種類の快く響く言葉を用いて、c[形態の面では]語りによってではなく演じる方式をとり、d 憐れみと畏れを通じ、そのような諸感情のカタルシスをなし遂げるものである(Poe.6,1449b24-28)

すなわち、喜劇と悲劇の定義の各々は、模倣の対象(A、a)、模倣に用いる素材(B、b)、模倣の形態(C、c)、カタルシスの働き(D、d)の四部分から成っている。このうち、模倣の対象、素材、形態は、喜劇の場合も含めて『詩学』第１～３章が詳述している内容であり、それらをもとに『詩学』第六章で悲劇の定義が提示されているのだから、この一事に着目するだけでも、「コワスラン」の著者が、直接的にせよ間接的にせよ、『詩学』の内容を知っていた可能性は大きいと考えられよう。さらに、喜劇のカタルシスの働きを述べたDでは「滑稽さ」が強調されており、これは『詩学』において、喜劇の前身である風刺詩とは異なる喜劇固有の特質に「滑稽さ」が挙げられているのと一致する（Poe.4,1449a34-38)。この点でも、「コワスラン」の著者が『詩学』の内容を知っていた可能性は大きい。もしアリストテレスが喜劇論を残していたならば、「滑稽さ(**γελοῖον**)」が鍵概念であっただろうことは、現存する『詩学』からも十分に推察されるからである。

ただし、ベルナイスが注意を促すように、定義の分節構造が酷似していればこそ、「コワスラン」の著者が『詩学』の悲劇論を真似て喜劇の定義を捏造した可能性もあり、警戒を要するといえる。ここで示されている喜劇の定義がアリストテレスの見解にどの程度忠実なのか、それを判断するための手がかりを得るには、喜劇と「滑稽さ」の関係について、現存する『詩学』とアリストテレスの他著作に材料を求めるほかない。本稿第３節で述べるように、『ニコマコス倫理学』における「滑稽さ」への言及が注目されるのはそのためである。

しかるに、喜劇の定義における「滑稽な行為の、それも大きさを持たないが完結した行為の模倣」という規定については、「大きさ(**μέγεθος**)」が何を意味するかについて検討を要する。というのも、もし「大きさ」が喜劇で描かれる行為の物理的な規模(上演時間や語数、もしも書物の体裁を取るならば頁数)を意味するのなら、喜劇が「大きさ」を持たないことはありえないからである。したがって、喜劇が持たないといわれる「大きさ」は、物理的な規模とは別の意味、例えば「壮大さ」のように評価的な性質にならざるをえない。実際、ヤンコは「壮大さ(grandeur)」と解している[16]。しかし、そのように解釈すると、悲劇の定義における「大きさ」(物理的な規模)とは別の意味になってしまい、解釈上の整合性を欠くという問題がある。同一の語が悲劇と喜劇の定義において共通に用いられながら、担う意味が異なるという事態は、正当な理由がなければ受け入れがたい。

---

[16] Janko[1984]p.25。また、北野雅弘「アリストテレス『詩学』の喜劇論―そのミュートスとカタルシス―」、『西洋古典学研究』、2001、p.60 もヤンコと同じ解釈を採っている。

そこで仮に、文法的に全く異なった解釈を採り、件の一節を「喜劇とは…完結した大きさを持たない行為の模倣である」と解してみよう[17]。この文は、喜劇が物理的な「大きさ」を持つことと両立する仕方で解されねばならないから、敷衍すれば、「大きさを持つが、完結していない行為の模倣である」の意になる。では、「完結していない行為」とはどういうことか。『詩学』の悲劇論において「完結性」が「全体としてのまとまり」を意味することに鑑みるならば、「完結していない」行為とは、全体としてのまとまりがない行為であり、要するに全体としてまとまりのないストーリーということになる。ところが、この理解は、『詩学』の論述に照らす限り正当性を持たない。というのも『詩学』第 8、9 章では、喜劇、悲劇、叙事詩のいずれもがストーリーに統一性を持つべきだと主張されており、とくに喜劇に関しては普遍的なストーリー(Poe.5, 1449b6-91449)を持つこと、しかも劇中の出来事同士が相互に緊密な関係を持つ仕方での普遍的なストーリー(Poe.9, 1451b11-15)であることが明確に述べられているからである。よって「コワスラン」の言明について、喜劇が「完結していない」行為を模倣すると解釈することはできない。『詩学』との整合性を期す限り、先に掲げたヤンコの解釈、すなわち「喜劇とは…壮大さを持たないが完結した行為の模倣である」という理解を採用しなければならない。

では、喜劇と悲劇の定義で「大きさ」の意味が異なることを我々はどうとらえればよいのだろうか。一つの可能性としては、「コワスラン」の著者が、『詩学』のテクストに混在する物理的規模としての「大きさ」と、評価的な「壮大さ」を整然と区分できず、混乱していたことが考えられる。検討のために『詩学』から三例引用しよう。

(1) 悲劇および喜劇の演劇的な様式が、諷刺詩および叙事詩の古い様式よりも壮大であり、いっそう尊ばれた(Poe.4,1449a5-6)
(2) また、大きさ(規模)の点でも変化がある。悲劇は、もともと関係の深かったサテュロス劇の様式から移ろうことによって、短いストーリー構成を脱した(Poe.4,1449a19-21)
(3) 悲劇のストーリーは…主人公の境遇が不幸から幸福へ、もしくは幸福から不幸へ転換することができるほどの大きさを持っているとき、それが大きさの限度として十分なのである(Poe.7,1451a11-14)

(1) ～(3)では同系のギリシャ語が用いられており、どの箇所でも「大きさ」、「壮大」いずれもの解釈が可能である。文脈に即して訳し分けられていることは(1) と(3)において明瞭であろう。ただし(2)では、ハリウェルのように「壮大さ」ととらえる論者もおり、解釈が分かれている。このように曖昧な文脈が『詩学』に存在することから、「コワスラン」の著者が「大きさ」を二義的に理解し、その結果として喜劇と悲劇の定義で「大きさ」の意味が異なることになったとも考えられよう。

では翻って、『詩学』が述べる喜劇のストーリーの統一性・完結性・普遍性を、「コワスラン」は継承しているだろうか。この視点から、第Ｘ～ＸⅥ節の「喜劇の構成要素」を検証しよう。

[17] ギリシャ語文の句読法を変えることによって、このような解釈が理論的には可能となる。

Ｘ　喜劇の構成要素は、ストーリー、性格、思考、語法、歌曲、視覚効果である。

ＸＩ　喜劇的ストーリーは、滑稽な行為で組み立てられたストーリーである。

ＸⅡ　喜劇の[登場人物の]性格は、道化者、皮肉屋、見栄っ張りである。

ＸⅢ　思考には二種類あり、[主観的な思考としての]意見と[客観的な思考としての]証明である。[証明には五つあり、]宣誓、契約、証言、拷問審査、法律である。

ＸⅣａ　喜劇の語法は、広く行き渡った大衆的な語法である。

ＸⅣｂ　喜劇詩人は、登場人物たちに彼ら自身の母国語を与えなければならないが、喜劇詩人自身には当地の言語を与えなければならない[18]。

ＸＶａ　歌曲は音楽[19]に固有のものである。それゆえ、[歌曲は]音楽から自律的な原則を得なければならない。

ＸＶｂ　視覚効果は、演劇に調和した仕方で大きな有用性を提供する。

ＸⅥ　ストーリーと語法と歌曲はすべての喜劇作品に見られるが、思考と性格と視覚効果は少数の喜劇作品に見られる。

ここで列挙されている喜劇の六つの構成要素は、次に掲げる『詩学』における悲劇の六つの構成要素と完全に一致する。

……すべての悲劇は六つの構成要素を持つことになり、それらによって悲劇作品の質が決まる。すなわち、ストーリー、性格、語法、思考、視覚効果、歌曲である(Poe.6,1450a7-10)

悲劇と喜劇がともに古代演劇の様式に従っていた以上、基本的に構成要素が一致するのは当然ともいえよう。しかし、悲劇と喜劇のジャンルの相違からして、構成要素の各々が帯びる性質は異なる。たとえば、悲劇が模倣するのは真面目な行為であるのに対し、喜劇では滑稽な行為である。悲劇の登場人物が優れた人間であるのに対し、喜劇では道化者、皮肉屋、見栄っ張りとなる[20]。また、「思考と性格と視覚効果は少数の喜劇作品に見られる」と限定的に語られているのもそのことに関連し、登場人物が有徳者でない以上、思考と性格が喜劇で重んじられないのは当然の帰結である。かくして、「コワスラン」の内容は、構成要素の性質という点で悲劇と喜劇を正当に対照づけているといえる。

---

[18] この部分は難解で、論者によって解釈が分かれる。當津武彦「アリストテレスの喜劇論と Tractatus Coislinianus」、美学会編『美學』27(4)、1977、p.70 は、「喜劇詩人は、自国の人物には彼みずからの母国語を語らせなくてはならないが、異国の人物にはその土地の言葉を与えなくてはならない」と解する。他方、ヤンコ[1984] p.39 は、「喜劇詩人は、登場人物たちに彼ら自身の母国語を与えなければならないが、詩人自身には当地の言葉を与えなければならない」と解する。

[19] **μουσική** というギリシャ語が「音楽」という限定的な意味で用いられているのが注目される。この用語法は、「コワスラン」の著者が、紀元後 1 世紀に活躍したフィロデモス以降の人物であることを推察させる。

[20] 『詩学』では、喜劇の模倣対象が「今現実にいる人々よりも劣った人間たち」(Poe.2,1448a17-18, cf.4,1448b26,5,1449a32-33)といわれる。

また、「思考」が「意見」と「証明」に二分されているのは『詩学』第６章 1450a6-7 と一致しており、この点も「コワスラン」の著者が『詩学』の内容を知っていたことを示唆する。

ここで注目したいのは、「語法」の問題が第ⅩⅣａ、ｂ節で取り上げられていることである。これは、「コワスラン」第Ⅴ節において「喜劇の滑稽さは、語法と行為から作り上げられる」と述べられているのを踏まえれば、理解可能となる。すなわち、登場人物の滑稽な行為と並んで、滑稽な語法(言葉づかい)が喜劇の滑稽さを生むのである。しかし、そうした滑稽な言動によって喜劇の目指す「滑稽さ」が達成されるのなら、喜劇作品全体のストーリーはどのような役割を果たすのか。作品が全体として統一された滑稽なストーリーになっている必要は必ずしもなく、登場人物による個々の滑稽な言動がその都度観客を笑わせればよいのか――この点を解明することが、第ⅩⅠ節の「喜劇的ストーリーは、滑稽な行為で組み立てられたストーリーである」の意味を理解する上での鍵となる。「コワスラン」で示された「滑稽な行為で組み立てられたストーリー」と整合する論点が『詩学』に見出せるかどうか、それを探る作業に移ろう。

３　現存する『詩学』が示唆する喜劇論

既に述べたように、『詩学』では喜劇のストーリーの統一性や普遍性を認めている。しかも、喜劇のストーリーが生み出す効果についても断片的な言及がある。それは、「滑稽さ」に関わる論点と、「快」に関わる論点の二つに分かれる。しかるに、アリストテレスの『弁論術』を参照するならば、「滑稽さは快いものに属する」といわれ、人間、言葉、行為が滑稽なもの、すなわち快いものになりうると述べられている(Rhet. Ⅰ 11,1371b35-1372a1)。この直後に「滑稽なことについては『詩学』の中で別途規定した」(Rhet. Ⅰ 11,1372a1-2)と記されている点を踏まえると、『詩学』で論じられたであろう「滑稽さ」が「快」と緊密に結びついていたことが想像される。しかるに、現存する『詩学』では、喜劇の「滑稽さ」に言及した部分と、「喜劇に固有の快」に言及した部分は隣接しておらず、議論としての一体性もない。そこで、それぞれを順次検討することにする。

まず、喜劇の前身である諷刺詩との違いを語る文脈で、喜劇が目指すのは「諷刺」でなく「滑稽さ」だといわれる（Poe.4,1449a34-38)。アリストテレスの叙述によれば、滑稽な題材をはじめて取り込んだのはホメロスである。また、風刺詩は実在する特定個人を狙い撃ちするものであったのに対し、喜劇は普遍的なストーリーを創作した上で固有名を考案する点が異なる（Poe.5,1449b5-9; 9,1451b11-15)。すなわち、喜劇の滑稽さは、実在する特定個人を嘲笑する類のものではない。

この『詩学』の論点を踏まえるとき、「コワスラン」の次の箇所に一定程度の整合性が見出せる。

Ⅶ　喜劇は、誹謗とは異なる。なぜなら、誹謗は現前する一切の劣悪さを包み隠さず言い立てることであるのに対し、喜劇はいわゆる誇張を要するからである。

Ⅷ　揶揄する人は、心身の欠陥をあげつらおうとする。

ここで、「喜劇は、誹謗とは異なる」について当津[21]の考証を参照すれば、「誹謗」とは喜劇詩人クラテスより以前の諷刺詩の特質だという。『詩学』では「アテナイ人の中ではクラテスが最初に諷刺詩の姿から脱却し、[喜劇の]普遍性を持った話、つまりストーリーを創作し始めた」(Poe.5,1449b7-9)といわれているので、クラテスを境目として諷刺詩の「誹謗」から喜劇の「誇張」に転換したことは、『詩学』でいわれる「諷刺」から「滑稽さ」への転換に該当することになるだろう。さらに、『ニコマコス倫理学』では、「誹謗」と「揶揄」が対照づけられている。それによれば、「誹謗」は事柄によっては法で禁じられる場合もあるのに対し、「揶揄」はそうではなく、とくに上手に揶揄する人は他人の欠点のすべてを言い立てはしないといわれている(ENⅣ8,1128a25-31)。つまり、洗練された自由人であれば揶揄に対して抑制的な態度をとるというのである。この論点は「コワスラン」の第Ⅶ、Ⅷ節とほぼ重なり合うものであり、喜劇の「誇張」とは、穏やかながら効果的な揶揄の方法を指すらしいことが想像できよう。また、「心身の欠陥をあげつらう」揶揄に適度な加減が求められているのだとも推測されよう。いずれにせよ、「滑稽さ」と「誹謗」、「揶揄」を論じる内容は、「コワスラン」を含む複数の文書間で整合性を持つといえる。

さらに、「滑稽さ」をめぐる議論は「喜劇のカタルシス」とも密接な関連を持つ。それは、「コワスラン」における喜劇の定義で次のようにいわれていたからである。

> Ⅳ　喜劇とは…快と滑稽さを通じて、そのような諸感情のカタルシスをなし遂げるものである。喜劇は、滑稽さを母として持つ。

しかるに、問われるべきは「カタルシス」の意味である。『詩学』における「悲劇のカタルシス」が何を意味するかについては、研究者の間で一致した見解はないものの、「[悲劇は]憐れみと畏れを通じ、そのような諸感情のカタルシスをなし遂げるものである」(Poe.6,1449b24-28)というカタルシス句が、次の一節によって言い換えられていることは広く認められている。

> [悲劇の]詩人は、憐れみと畏れから生じる快を、模倣を通じて作り出さなければならない
> (Poe.14,1453b12-13)

ここで「快」への言及が見られること、さらに引用箇所の前行において「悲劇に固有の快」(Poe.14,1453b11)への言及があることから、「カタルシス」が「快」と密接な連関を有することは疑いえない。カタルシス作用が「要素Ａを通じて要素Ｂを作り出す」の形式で定式化されるのは既に明らかだが、『詩学』の「悲劇のカタルシス」では「快」が要素Ｂに該当するのに対し、「コワスラン」の「喜劇のカタルシス」では「快」が要素Ａの一つに該当するという点で差異がある。これを下記のように図式化して示せば、この差異が、悲劇と喜劇のジャンルとしての差異を端的に表すものであることが判明しよう。

---

[21] 当津 op.cit, p.70

	【要素Ａ】	【要素Ｂ】
悲劇のカタルシス	憐れみと畏れ(『詩学』)	悲劇に固有の快(『詩学』)
喜劇のカタルシス	快と滑稽さ(『コワスラン』)	喜劇に固有の快（『詩学』)

しかるに、「憐れみと畏れ」は苦痛な感情に属するから、悲劇のカタルシスでは「苦」を通じて「快」が生み出されることになる。他方、喜劇のカタルシスでは、「滑稽さ」が「快」を伴う点に着目すると、「快」を通じて「快」が生み出されることになる。よって、喜劇に関わる二つの「快」は何らか性質、身分の異なるものとして扱われなければならない。それゆえ、「コワスラン」が言及する「快」が専ら要素Ａの「快」であるのに対し、『詩学』が言及するのは専ら要素Ｂの「喜劇に固有の快」(Poe.13,1453a35-36)である点が注目される。

『詩学』が言及する「喜劇に固有の快」(Poe.13,1453a35-36)とは、善人が幸福になり悪人が不幸になるような勧善懲悪的ストーリー(Poe.13,1453a31-33)や、敵同士が仲良くなって退場する結末(Poe.13,1453a36-39)が生み出すような快である。いずれの例も、ストーリーが滑稽であるゆえに快が生じるわけではなく、人間観を含むストーリーに対する一種の人道的な評価が観客に要素Ｂの快をもたらすのである。この点、要素Ａの「快」を掲げる「コワスラン」は、「滑稽な行為で組み立てられたストーリー(第ＸＩ節)」を重視する。すなわち、『詩学』が例示するようなストーリー展開の構築は「コワスラン」では全く示唆されず、笑いを誘う滑稽な行為、その意味で快い行為だけが喜劇作品を構成すると考えられていることになる。したがって、『詩学』と「コワスラン」では、喜劇のストーリーに対する見解が大きく隔たっているといえる。

このような隔たりは、当然の帰結として、カタルシス作用に関する説明の相違を結果する。「コワスラン」第Ⅲ、Ⅳ節では次のようにいわれている。

> Ⅲ　悲劇は、魂が持つ畏れの感情を、憐れみ(**οἴκτος**)と畏れ(**δέος**)を通じて取り除く。[そして、]均衡のとれた(**συμμετρία**)畏れを持つことを目指す。それは、苦痛を母として持つ。
>
> Ⅸ　悲劇には均衡のとれた畏れが、喜劇には均衡のとれた滑稽さがなくてはならない。

引用箇所で用いられている **οἴκτος** と **δέος** は『詩学』には登場しない語であり、『詩学』の場合、「憐れみ」、「畏れ」はそれぞれ **ἔλεος**、**φόβος** という別の語で表現される。また、悲劇のカタルシス作用の説明に当たり、「憐れみ」よりも「畏れ」に重心が置かれているのが「コワスラン」の特徴である。それはおそらく、「憐れみ」よりも「畏れ」の方が「苦痛」としての性質を明瞭に持つと考えられているからであろう。また、「均衡のとれた畏れ」、「均衡のとれた滑稽さ」という概念は「コワスラン」にのみ見られる。この「均衡」の概念に関し、ヤンコ[22]はアリストテレスの倫理学説における「中庸」説との緊密な結びつきを見て取るが、アリストテレス自身が「均衡」の概念

[22] Janko[1992]

を用いていない以上、このような解釈の正当化は困難だと思われる。

以上までを総括すれば、喜劇を含めストーリー構築を重視する『詩学』に対し、「コワスラン」の記述はストーリー論に乏しいこと、また、作品が生み出す快ないしカタルシス作用について『詩学』と「コワスラン」の説明方式が異なることが明らかとなった。では、喜劇の「滑稽さ」を議論の基調とする点では共通しつつも、ストーリーに対する位置づけに違いが見られることをどのように理解すればよいのか。この点を考察するため、古代喜劇の変遷を瞥見することにしたい。

4　古代喜劇の変遷

一般に古代喜劇は、古喜劇(紀元前五世紀)、中喜劇(紀元前四世紀前半)、新喜劇(紀元前四世紀後半)の三時代に区分して理解されている。すなわち、古喜劇の代表的詩人はアリストファネス(後期の作品は中喜劇の特徴を持つ)、新喜劇の代表的詩人はメナンドロスである。アリストテレスが生きた時代は中喜劇の時代に当たっていた。

しかるに、ヤンコが「コワスラン」を、『詩学』第Ⅱ巻の喜劇論からの直接の要約と結論した理由は、その記述内容に、メナンドロス以降の新喜劇が持つ特徴(悲劇のストーリーと類似した再認や逆転、登場人物の失敗、五幕構成、登場人物の類型化、韻律の多様化)が含まれないからである。新喜劇はアリストテレス死後に隆盛した潮流であるから、「コワスラン」の記述にその特徴が含まれないことは、文書の内容がアリステレスと同時代の喜劇観に基づいていることを推測させるわけである。ヤンコは、「コワスラン」の基になった文書の著者として中喜劇時代の幾人かを候補者とした上で[23]、最終的にはアリストテレス以外にありえないという結論を導いたのであった。

簡略にいえば、アリストテレスのストーリー論は、詩作の中で最も発展を遂げていた悲劇を模範としており、喜劇のストーリーにも統一性を求めたとはいえ、やがて新喜劇が持つことになる複合的なストーリーを要求しはしなかったのである。現実に行われている詩作を研究対象とする『詩学』は、当然ながら時代状況から制約を受ける論考であり、アリストテレスが喜劇のさらなる発展を可能性として否定しなかったにせよ、分析の対象は彼自身が生きた時代の喜劇作品にとどまったといえる。

なおも『ニコマコス倫理学』第Ⅳ巻第８章 1128a22-32 では、下品な語法が笑いを誘った「昔の喜劇」と、抑制された暗示的表現を用いる「新しい喜劇」の相違が明確に語られている。しかるにアリストテレスのいう「新しい喜劇」は、上述の新喜劇とは時代が一致しない。彼の生きた時代を踏まえるならば、次のように対応づけられよう。

	紀元前五世紀	四世紀前半	四世紀後半
古典学の一般的な区分	古喜劇	中喜劇	新喜劇
アリストテレスの表記	昔の喜劇	新しい喜劇	——

[23] アンドロニコス、ヘレニズム期の著作家、テオプラストスが候補者に挙げられている。

こうした古代喜劇の変遷を念頭に置くと、「コワスラン」第ⅩⅧ節の次の記述が理解可能となる。

ⅩⅧ　喜劇は、古い時代には滑稽なものに富み、新しい時代には滑稽なものを捨てて真面目なものへと傾いてゆき、それらの中間の時代には両方を混合している。

ここでいわれる、「真面目なものへと傾いた」新しい時代の喜劇が何を指すかが問題になるが、後期のアリストファネスやメナンドロスの新喜劇のように、悲劇と同様、「再認」と「逆転」のストーリーを持つ喜劇作品と解してよいだろう。メレンドルフ[24]は、メナンドロスがアリストテレス哲学を継承したペリパトス派に学んだゆえ、『詩学』に知悉しており、喜劇に対する低い評価[25]を覆すため、独自の作品を創作したと推測する。また北野[26]は、メナンドロスが『詩学』第Ⅱ巻の喜劇論に従って創作したかもしれないと想像している。いずれにせよ、メナンドロスらの新喜劇は、『詩学』で賞揚された優れた悲劇作品の構造を模範として作られたと推測される。アリストテレスは、後代の喜劇の発展にも影響を与えたと思われるのである。

しかし、常に喜劇は発展する可能性を秘めていたにはせよ、真面目な題材を扱う悲劇を、滑稽な喜劇よりも優位に置くアリストテレス自身の評価は不動であった。『ニコマコス倫理学』で喜劇の歴史に言及されるのは娯楽論においてである。娯楽は人生の目的に属さず、休養にすぎないとする倫理学説が喜劇に対する評価の基にある。他方、真面目なストーリーを洞察し、知的な快を生み出す悲劇は人間の知性と感情だけが追求できる営みに属する。今日の我々が「芸術」と「娯楽」を対照づける視点は、そうしたアリストテレスの演劇観に淵源するとも考えうる。また、アリストテレスの芸術観においては、ストーリー創作に関わるミュートス芸術を考察する際、絵画や彫刻などエートス芸術が土台にあり、優れたエートス(性格)の作品が劣ったエートスの作品を凌駕するという思想が基本にあっただろう。それゆえ、劣った人物を主人公に据えて笑いを誘う喜劇は、悲劇よりも劣位に置かれたのである。無論、近代の演劇論は、古代の悲劇/喜劇の区分とは異なった分類を採用するが、基底ではこの二大分類を踏襲している[27]。

してみると、現存する『詩学』が悲劇と叙事詩に考察を絞っている理由も推測できる。第Ⅰ巻として、それら真面目な題材を扱うジャンルが考察され、おそらく第Ⅱ巻では、喜劇とその前身である諷刺詩が考察された。詩作は、それぞれ「真面目さ」と「滑稽さ」を旨とする、相容れない二つの大きな潮流に分かれたからである(『弁論術』第 3 巻第 18 章 1419b3-9 を参照)。かくして、『詩学』が二巻本であったという推測は、内容構成の上からも根拠を与えうるのである。

---

[24] Peter von Möllendorff, “Meiders *Samia* und aristotelische *Poetik*”, in Orchestra: *Drama-Mythos-Bühne, Festschrift für Hellmut Flashar anläßlich seines 65. Geburtstages*, ed.Anton Bierl and Peter von Möllendorff , Stuttgart/Leibzig,1994,pp.300-317

[25] 『政治学』1336b3-23 では、悪しき喜劇は青年の教育上、禁圧すべきだとも述べられている。

[26] 北野 op.cit.p.57

[27] 近代ではストーリーの結末によって悲劇と喜劇が分けられる。しかし、シェークスピアの『ヴェニスの商人』のように、分類しがたいゆえに「悲喜劇」と呼ばれる場合がある。